

人間・黒田三郎 黒田光子



人間・黒田三郎

著者——黒田光子

発行者——小田久郎

発行者——株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三—十五

電話二六七—八一四一（編集）二六七—八一五三（営業）振替東京八—八二二—

印刷所——文唱堂

発行日——一九八一年十二月一日

定価——一五〇〇円 1092-200045-3016

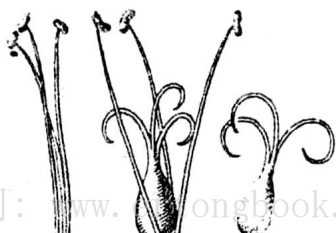
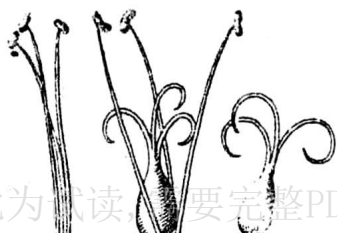
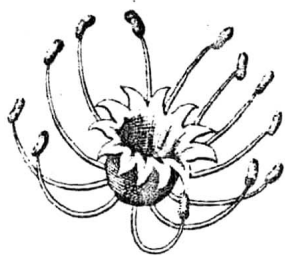
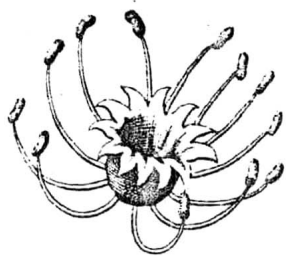
©1981, Mitsuko Kuroda

人間・黒田三郎 黒田光子





人間・黒田三郎



人間・黒田三郎

世間を怖れぬ者 スキャンダルの手 12

「恥」について 殴り倒されて男らしさを知る 17

我が家のダイコン柱 三郎、NHKを辞す 23

バスを降りそびれて 黒田の「ユカイな女房」 29

「酒の飲めない薬」を試す 涙ぐましい一枚の写真 33

男のなかの男 三郎、バスに轢かれる 38

飲んだ、書いた、恋した、その生涯 酒乱の男と恋の男 41

日本で二番目の大詩人 痛烈な詩人魂 47

咆吼庵の主 婦恋村の別荘のこと 50

ゴッコに生きる 精神コントロールのエキスパート 53

2

書簡集『ひとりの女』1948—1949

黒田三郎、そのA面とB面 スマートな紳士と飲んだくれ駄々子 56

三郎のなかのマジメ人間 「死」と抱き合せのヴィヴィッドな「生」の実感 67

三郎の書いた詩 最期の潔さ 73

三郎の遺書 「光子のことは僕が一番理解している」 77

夫と酒瓶と私 命の恩人を追いかけて「オレの酒を返せーッ！」 80

「であること」と「見えること」 互いの「悲しき片想い」 89

かなしい西部劇 真夜中の凄絶なアトラクション(須田ユリ) 95

恋愛期●1948

眼には眼を 三郎 100

光子を見ない振りして見ていてください 光子

102

僕はもう二度と泥酔したくなかった 三郎

105

「退く」も兵法 光子

108

化粧しないあなたの方がはるかに美しい 三郎

112

化粧しない顔がいいってうれしいの 光子

114

あなたの苦悩の方がより深い 三郎

115

龍門山へ二人で登ったら！ 光子

120

あなたのやさしさばかり思い出している 三郎

124

ニーチェやヤスパースに呪いあれ！ 光子

125

薄情なひとよ 三郎

128

光子、矜持を持って！ 三郎

139

僕が死ななきゃ信じないんだね 三郎 132

あなたの中のいちばん良い光子になりたい 光子 134

中国地方を出外れる頃から雪になりました 三郎 138

光子は生れてはじめて一所懸命生きています 光子 141

僕は肉体を賭けてあなたを愛する 三郎 144

ダンサーの稼ぎ高はすれてる度合 光子 147

一ヶ月の熱のグラフを送ります 三郎 150

脚をもんで下さるってこのひと言忘れないでしょう 光子 153

五月の半ばに迎えに来てね 三郎 155

光子を信じて！ 光子 158

喜んで光子にオンブして貰う 三郎 160

ひとりで涙ながしてはいやよ 光子 163

風邪で赤いホッペタをしてるなんて美人が台なしだ 三郎 165

とり返しのつかないエラー 光子 168

自分の女房のことは信じているよ 三郎 170

ダンサー英語には舌をまく 光子 173

相手を思つて己を曲げるよりあけすけに言おうよ 三郎 183

嘘つきじゃなくて「詩的真実」ね 光子 186

あなたは薄汚いところも下司なところもちつともない 三郎 196

ダラシノナイ光子をおこらないで！ 光子 193

禍い転じて福とする、これが僕らの生き方だ 三郎 199

僕の行くのを待っていて下さい 三郎 201

あとがき 206

1

黒田三郎と三十年

世間を怖れぬ者

スキヤンダルの手

二年程まえに長女が勤務先の商社の青年と、いわゆる社内結婚を致しましたが、この若いカップルを見ていますと、することが頗るスマートでした。婚約中も他人の噂にのぼるのを嫌って、会社では素振りも見せず、逢引きの打合せも気心知れた友人を中継所にして連絡し合うという周到さでしたから、娘が結婚直前に退職届を出すまで、社内で誰一人ご存じなかったと申します。

それに比べて両親の方は大違い、火のない所にまで煙を立てる「スキヤンダルの手」とても言いたいような無思慮な男女でした。

私が黒田と遭ったのは昭和二十二年、まだ放送会館が内幸町にあった頃で、黒田は経済安定本部づめの記者、私は半年遅れて入社し、都庁の記者クラブへ行っていました。ある時私は、記者仲間の連中に取りまかれて

「黒田君が「多菊嬢に惚れられて弱った弱った」——と言ってたぜ」

「黒田なんか惚れるくらいなら、チクシヨウ、何で俺に惚れないんだイ」

と口々にかからかわれてすっかり面喰らいました。翌々日、向いのデスクで原稿を書いてい

る黒田氏にこちらから走り書きの手紙を小さく丸めてポーンと放ってやったのです。

「ボン・ソワール、ムッシュウ。ご機嫌はいかが？　というよりお加減はいかが？　あなたはそんなことしてより一刻も早くお脳の加減を脳神経科のお医者に診て貰いになった方がよいのではなくて？　あなたが看板にしているインフェリオリテイ・コンプレックスとかいうものは、嵩じると被害妄想性神経衰弱になるらしいですね。妙な噂を聞きましたが……黒田さん！　いつ、私があなたに惚れました？」

ややあつて、黒田青年からの返書。

「身に覚えがありませんので、仰せのご趣旨がわかりかねますが……。ともあれ眼には眼を、齒には齒を、です。あなたも負けずに、クロちゃんが私を恋してるんだって……とNHK中に宣伝なさればよろしい。僕は協力を惜しまず、あなたのタイプライターや（その頃、私は暇をみては英文タイプの練習をしていたので）あなたの鞆をさげてお供いたしますよ。ザマァミロ」

彼が弁解をしないので、さきの噂のことがさっぱり分らなかったのですが、つい最近、亡夫の手記を読んでやっと呑みこめました。——彼が同期の友達と新橋のカストリ横丁で飲んでゐる時、私のことが話に出たので、黒田が、

「多菊君言つてたよ。君たち男の記者連中は、いずれも口さがないミ、ハ、ハ、ボーイばかりだつて」

「君は違ふのか？」

「そう、僕は点数が良いんだ。「黒田さんは大酒ばかり飲んで品行は低いけど品性は高い」
っていうご託宣だ」

そいつは凄じやないか、と皆が黒田を冷やかした——と書いてあります。こんなところから尾鰭がついた噂なのでしょう。

その頃、彼には既に婚約者があって私にその人の写真など見せましたし、私の方にも学生時代から四年越しの恋人がいました。ですから私たちは本の貸し借りをしたり、お茶や食事を一緒にしても、一点の紛らわしさもない付き合ひだったのです。しかし噂ばかり先行して、あの二人、もう「出来てる」の何のとあることないこと言われている只中、黒田は何の心算か、夜勤の筈なのに朝から報道部へ現れて

「感心だろう？　僕がこんな朝早く……君に逢うために出てきたんだ」

そう言つて私をお茶に誘い、人々の視線を背中に部屋を出かけたりしました。そして彼が「ラブレターだよ」と言つて手渡した手紙には

「ダス・メツチェンにしても、ダス・フロイラインにしてもいずれも中性名詞です。今まで貴女を中性として取り扱う限りにおいて、僕は愉しい、良い気持でした。ところがこの頃僕はそういう僕に自信を失いました。

しかし、惚れた、とか惚れない、とか言うような下世話な言い合ひは最初から問題外として、問題外としてのみ、座興の種になってもいいものではありませんまいか？　そういう噂などもあってもいいのです。聡明なあなたの、美しい誇りを、そのような下品な噂が傷

つけ得るなどとは、僕には考えられないことです」

この頃の彼の日記を開いてみると、

「×月×日

来ない日だと思っていた多菊君が、昼過ぎ局にやってきた。人もなげに僕の横に坐ったきりである。昨日課長に怒られた顛末をひとくさり話していた。笑い出したり、ゼスチュアをしてみせたり……吉田課長が、つい眼と鼻の先に坐っているというのに……」

「×月×日

今日、堀君に「多菊君と情死したいほどの心境だ」と言ったら、彼は毒気を抜かれてマジと俺を見ていた」

こういう黒田の日記を読めば、昔彼が『ひとりの女に』のなかで「馬鹿さ加減が僕と同じくらいで」と歌っているのを、誰しもナルホドと肯かれるに違いありません。この世間知らずと言うか、世間を憚からぬ青臭さだけは似た者夫婦だったわけで、後年女房は夫の棚下しをエッセイに書き、亭主はこれに涼しい顔をしていますし、夫が若い愛人を人目につくように連れ歩いても女房は意に介さず、後にそのお嬢さんの結婚式には夫にたのまれて、代りに出席するといった按配で、私どもの家庭のことは、色々と世間一般とは様子が違うようですから、良識あるかたのご理解から、はみ出すことが多いに違いないと存じます。

彼の日記にありました。